表現と見ることができる。このように法語類では、すでに念仏を行じている人についてその心の在り方を説いているものが多く、逆に念仏を行じるきっかけが説かれていない。

念仏を行じるきっかけについて法然は選擇によって信の確立を説いたが、証空は領解によって信の確立を目指したものと言えよう。領解とは『観経』に触れることであり、仏の願を信じることであり、また往生を願うことであるということができる。これによって信を確立したあとは、自然と念仏の生活に入るのである。

第四章　法然門下の安心論の同異

●第一節　安心と起行の関係

安心そのものの概念については、証空が仏教行者の心、法然、聖光は念仏行者の心と位置付けているが、いずれの諸師も安心という言葉より三心をそれぞれの著作に多用し、それを安心の内容としていることは共通している。すなわちこれら門下の間での共通の認識として浄土宗行者の心あるいは往生の正因としての心として三心があるのである。

諸師の思想を比較するうえで問題となるのは、安心の内容というよりは起行との関係であろう。

心と行の関係はにわとりと卵の関係のようであり、どちらが先かを議論することは空論であるかもしれない。しかし、心と行の関係を示す言葉がまた、それぞれの思想の特徴となっているのである。

法然は心と行とが相応すべきであるとする。このときの行とは選擇本願の念仏行を指すことは明らかであろう。聖光は、心は行を勧め行は心を守ると言う。この場合の行は法然と同様念仏行を指す。ところが隆寛と証空は多少前提が異なると考えられる。それはある行者がいて、念仏を含む行を行じているとする。この行者が、念仏を行じていても自力の心が捨てられず迷っていた場合、このときの行者の安心は往生の正因としての心ではないことは明らかである。しかし、あるときこの行者が善知識に遭ったりあるいは『観経』を尋ねることによって、忽然と意識の転換がなされたとする。この心の転換によって、同じ行でも雑行であったものが往生の行へとまた転換されるのである。この立場が隆寛・証空である。すなわち、心の持ちようで行の性質が変わると言うのである。このような意味ではこの両者は安心重視型の思想と言うことができる。

隆寛・証空は前提が異なるのではないかと述べた。その前提とは信の確立の仕方であると考えられるのである。これが諸師の思想を分ける重要な問題であると考えられるため、次に

節を改めてまとめてみたい。

●第二節　信の確立法

法然の信の確立の仕方については、非常にわかりやすい形で『選擇集』に述べられている。それはまず仏教を志す人を対象にして、選擇によって行に対する信を確立することから入るのである。そして行を選び取ったのち、三心を具足して往生するのであるが、もちろん行に対する信を確立することもすでに三心の一部である。

聖光は安心疑心・起行疑心を立て、安心疑心は往生できないが起行疑心は往生できると言った。前に述べたように起行疑心においては、すでに本願行に対する深心は確立していることを前提としている。したがって、法然と同様に選擇をその思想の原点に持っていることがわかる。

それでは隆寛における信とは何であろうか。隆寛自身の信は自力の行を行じてきたことの反省から生まれたことが示唆された。この意味するところは、同じ念仏でも三心不具の往生できない念仏が、本願を正しく知ったことで三心具足の念仏となり、往生の行となった事実であろう。他力に帰し本願に帰し本願行に帰すところに、三心が具足すると言う。

これはおそらく仏教を求め長い間苦しんできた人の論理とも言える。そこで隆寛は回入と